# 鉄-21世紀への夢

## 創立80周年記念懸賞作文入賞作品紹介 7

日本鉄鋼協会では、創立80周年を記念して平成7年度に懸賞論文を募集しました。全国から寄せられた第1部（中学・高校生の部）195編、第2部（大学生・一般の部）187編のうち、選ばれた入賞作品について順次掲載してまいりましたが、今回で最終回とします。

### 第1部　3等賞

## ぼくの周りの鉄に思う。

新潟県見附市立西中学校2年　天田　輔

—ぼくの周りをながめてみる。—

よく考えると、鉄は、「えんの下の力もち的存在」なのかもしれない。

ぼくの部屋をじっくりながめてみて、鉄の存在はいくつかあった。ストーブ、小物入れなど、自分の本来の銀色をアピールせず、影にかくれて活躍しているところは、「オトコ前」というのがピッタリだろう。

そんな「オトコ前な鉄」の中でも、ぼくが一番オトコ前だと思ったのは、ネジやクギである。あんな小さな体であんなに大きな荷物を支えている。これは、鉄の力強さの象徴であり、「男の中の男」まさに、「紳士」である。

このように鉄の良い点は、力強さというのもあげられると思う。

今、物の材質は、プラスチックが多くなっている中で、いまだ鉄が自分の地位を守っているわけは、その強度と、手ざわりと、気品のある重みと、鋭さだと思う。

同じ力でなぐったなら、プラスチックや木よりも、鉄の方が絶対痛い。これが強度。

手ざわりというのは、あのすべすべ感、時にはざらざら感、プラスチックにはだせない味だと思うし、夏、鉄にさわった時のひんやり感は忘れられない。

気品のある重みとは、ただ重いのではなく、手にしっくりきて、持っただけで充実感のある、あの程度な重みである。

そして鋭さ。これが鉄の最大の利点だと思う。そしてプラスチックや木には絶対マネできないことだと思う。

たまにテレビなどでみかけるが、鍛冶屋さんなどが、まっ赤になった鉄を何度も何度も心をこめてたたいている。それだけでドラマである。しかしプラスチックや木は、その時点ですでに溶けたり燃えたりしてしまっているだろう。ドラマどころではないのだ。

しかし鉄は、うたれてもうたれても、苦しみを自分の中にぐっとこらえ、その分だけ強くなっていく。まさに努力するべき人間の理想をえがいているのだ。そして鉄は、さらにさらに自らを鍛え、あのズッシリとした重量感を得、より鋭い鋼へと変わっていくのだろう。

ぼくが最近知った鉄の意外な利点というのがある。それは地球にやさしいということだ。あの重く硬い鉄からは想像もつかないことだった。

今地球には、環境問題という大きな課題がある。日本でもいろいろな対策がとられていたり、ちまたでリサイクルブームがおこっていることなんかをよく耳にする。

どうやら鉄もリサイクルが簡単にできるらしい。たしかに鉄は、溶かして形を変えることができ、リサイクルにはもってこいのものであり、鉄のリサイクルがもっと身近になれば、鉄は主婦たちの人気者になることは間違いないだろう。

またリサイクルだけでなく、どうやら鉄が自然に戻る時も地球にやさしく、二度おいしいらしい。その理由は鉄は酸素と結びつくと、自然にかえっても環境に害を与えないからだ。これは、理科でならった酸化鉄である。

理科でならったことといえば、磁石の勉強があった。そこにも鉄のすごさがあったのである。それは、磁石を鉄にくっつけると、磁力がつたわったりそれ自身が磁石になったりすることだ。うまくいけば、一つの磁石でたくさんの鉄をすいつかせることができる。つまり、磁力とかエネルギーを無限大にふやすということにもつながっていくのではないだろうか。いつか、こんな鉄と磁石の合体技を応用した強力なモーターとか発電機とかが作られればいいなあと思う。

とにかくぼくはこの作文を書いていて、いろんなことを学んだ。鉄の機能性、力強さ、そして時代のニーズにあっていること。

ぼくがこれを書いていて思ったことを、全部ひっくるめて一言で言おう。

「鉄はエライ！！」